



UICC日本委員会

Japan National Committee for UICC

ニュースレター

事務局 公益財団法人がん研究会 がん研究所
〒135-8550 東京都江東区有明3-8-31
Tel:03-3570-0542 Fax:03-3570-0546

JUNE, 2016

No.

21



世界

UICC世界がん会議（東京-1966） 50周年記念行事の準備進む

この記念行事は、日本のがん研究と対がん運動発展の跳躍台となった50年前の歴史的な世界がん会議の成功を記念し、先人の努力を称え、更にその後のUICC活動の轍を辿ることを通じて、今後の発展の力を生み出す目的で行われる。現在急速にその準備が進行している。

記念行事は、1) 小学生のがん教育の振興に関する日本語シンポジウム、2) グローバルな対がん運動に関する国際シンポジウムおよび 3) 50周年記念祝賀会 の3部に分かれている。1) と2) に関しては、2016年10月22日（土）、2016年の日本癌治療学会の第三日目に、横浜パシフィコの会場の一部（R304）を使用して、癌治療学会と合同で挙行することになっている。

1. UICC/JSCO合同シンポジウム（予告）

小学生からのがん教育 9:00~11:30 横浜パシフィコ（R304）

癌治療学会の西山正彦先生とUICC日本委員会の望月友美子先生が座長として現在プログラムを詰めている。壇上に固定討論者3名を置き、以下のいくつかのテーマにつき数名の演者の報告をうけた後、その演者にも壇上に上っていただき回転パネルディスカッションを進行させる予定である。

テーマは、以下の様なものが挙げられている。

- 小学生のがん教育の現状と課題
- 小学生からのがん教育における専門家の役割

- 教材開発（教員用、子供用）
- 外部講師の確保と教員研修・育成システム
- がん教育の評価とフォローアップ

小学校からのがん教育の必要性は誰もが認めているが、バリアがいろいろあり、なかなか実際には動かない。どこからバリアをくずしていくか、そのために我々は何をすべきか、何ができるかという議論を深めることが期待される。

CONTENTS

UICC 世界

UICC世界がん会議（東京-1966） 50周年記念行事の準備進む	1
1. UICC/JSCO合同シンポジウム 小学生からのがん教育	
2. UICC/JSCO合同国際シンポジウム	
3. 記念祝賀会	

UICC 日本

UICC世界対がんデー2016 公開シンポジウム 小学生のがん教育と子どものがん	4
---	---

UICC アジア

Joint Symposium(Korean Cancer Association & UICC - ARO).....	7
第8回アジア太平洋がん予防学会.....	9

2. UICC/JSCO合同国際シンポジウム (予告)

国際シンポジウムのプログラムは下記の様にほぼ決定している。UICCを中心とした世界の対がん運動の実践状況と課題をUICCの前及び現会長が、アメリカがん治療学会の対がん運動をアジアに於ける活動

も含めてASCO会長が、アジアの対がん活動についてアジアがん学会会長が、さらに日本からの対がん運動の展開について三人の日本の演者が報告する。

UICC-Japan/JSCO-Joint International Symposium on Global Cancer Control

Date : October 22, 2016 13:30~15:30

Place : Room 307, PACIFICO Yokohama

Chair persons : Hitoshi Nakagama and Kazuhiro Yoshida

Speakers and topics

1. Mary Gospodarowicz

Past-President of UICC, Medical Director of Princess Margaret Cancer Center, Canada

Global cancer control issues including palliative care, pain control and survivorship

2. Tezer Kutluk

President of UICC, President of the Turkish Association for Cancer Research and Control, Turkey

The World Cancer Declaration as the goal of UICC activities, and the reduction of inequalities in childhood cancer

3. Julie M Vose

Immediate Past President of ASCO, Professor of Internal Medicine (Oncology/Hematology), Nebraska Medical Center, USA

ASCO's global oncology strategy and activities in Asia

4. Keizo Takemi

Member of the House of Councilors of Japan, and an expert in global health issues

How Japan can contribute to Universal Health Coverage

5. Jae Kung Roh

Secretary General, APFOCC, Professor of Yonsei University, Korea

Effort to overcome cancer problems in Korea

6. Hideyuki Akaza

Director of ARO, Professor of The University of Tokyo

The unique aspects of cancers in Asia

7. Tetsuo Noda

Board Member of UICC, Director of the Cancer Institute of JFCR

The Yamagiwa-Yoshida International Fellowship:

40 years of contributions to UICC from Japan

3. 記念祝賀会 (予告)

記念式典は、10月22日、16:00～18:00に横浜みなとみらいのインターコンチネンタルホテル ボールルームで開催される。100人の会場なので招待者のみのclosedの会になる(会費1万円)。

UICC-Japanのメンバー組織の方々には、この日は全日、全ての行事に積極的に参加することが希望されている。UICC/JSCO合同セッションに出席される方には、あらかじめ登録して頂き、無料入場券が発行される。

現在計画されている式典の進行は以下のようである。

司会：田島，河原

1. 開会の辞 田島和雄
2. 東京国際がん会議の記録映画の上演 (10分)
3. 講演 菅野晴夫：UICC 国際がん会議と吉田富三先生 (15分)
4. 講演 北川知行：UICC 国際がん会議のインパクト (15分)
5. 乾杯 常陸宮殿下
歓談 (20分)
6. 祝辞 (30分) 6人ほど
7. アトラクション：バイオリン 青木-Charvat 奈緒子 (15分)
歓談 (20分)
8. 閉会の辞 野田哲生

1966年 UICC 世界がん会議でのひとこま



皇太子殿下ご夫妻がご臨席された
日本武道館での開会式



常陸宮妃、高松宮妃、溝口歌子氏

佐賀で盛り上がった

UICC世界対がんデーシンポジウム 小学生のがん教育と子どものがん

2016年のUICC世界対がんデー公開シンポジウムが、2月6日佐賀市アバンセで開催されました。今年度のテーマは、「小学生のがん教育と子どものがん」でしたが、今回始めて、子どもの頃からのがん予防だけでなく、小学生の仲間にもいる小児がんの子どもの問題が取り上げられることになりました。300席の会場に当日350名の参加があり、立ち見席ができるほどの盛会となって、市民の関心の高さに驚きました。

感動的だった子どもミュージカル

始めに、北川知行UICC日本委員会委員長、池田秀雄佐賀県副知事、中川原章佐賀県医療センター好生館理事長の挨拶があり、その後、「ティーンズミュージカルSAGA」の小学生達が、小学校における小児がんの子どもに対するいじめをテーマとした感動的な創作ミュージカルを演じ、満員の聴衆に大きな感動と涙を与えました。

全体を通しての司会は、望月友美子氏（国立がん研究センターがん対策情報センターたばこ政策支援部部長）と中川原章の二人で行いましたが、講演会は三部構成で、第一部「小児がん、生きる」、第二部「生きる喜び、命の大切さ」、第三部「予防（大人のがん予防）」としました。

なぜ小学生のがん教育が必要か

第一部では、先ず、北川知行氏が今回の公開シンポジウムの趣旨について話され、何故小学生からがんの教育をする必要があるのか、これまでのUICC日本委員会の活動を交えて説明され、さらに、小学校には多くのがん経験者の子どもがいて、この子ども達のこと十分に考えながらがん教育を進める必要があることを主張されました。



小児がんへの正しい知識を

次に、わが国の小児がん生存者に対する長期フォローアップ活動のパイオニアでもある稲田浩子氏（佐賀県医療センター好生館小児科部長）が、成人がんと違って、予防することの困難な小児がんに対する正しい理解と支援が必要であることを強調されました。

また、ご自身が小児がん経験者である林志郎氏（九州沖縄広域小児がんネットワークQOL+代表）は、小児がん経験者が、自ら抱える苦しみや悩みを乗り越えて前向きに生きることの大切さや、周りの教師や親ががんに対しての正しい理解と知識を持って小児がんの子どもに接することの重要性を訴えられました。

子どもをがんでなくした母親の思い

第二部では、子どもを亡くした母親として、また自らがん経験者として、前川育氏（NPO法人周南いのちを考える会代表）が、「いのちを育むがん教育を考える」と題する感動的な講演をされました。

その中で、ボランティアとしての草の根運動には限界があること、また、がん教育には学校や行政がきちんと取り組むことが重要であることを強調されると同時に、知ることでもがん予防に対する取り組み方が変わることや、教育された子どもが親に伝えると、その論された親の意識が変わっていくことも紹介されました。



小学校のがん教育は十分可能

さらに、佐賀県のがん教育モデル中学校としての取組みを経験された土岐洋二氏（武雄市立川登中学校教員）は、具体的な小学校での取組みとして、食育、防煙教育の導入が可能であることや、教科書の生活習慣病のところに「がん」を入れることが必要であること、さらに、がん教育が小学校、中学校、高等学校へと連携されることの重要性を強調されました。

がん患者と教師の共同作業で

また、大分県の養護教諭・故山田泉さんが始められた「いのちの授業」を小学校、中学校で実践されていて、自らも乳がん患者である三好綾氏（NPO法人がんサポートかごしま理事長）は、がん患者が教師と共働して小学生、中学生にがんの知識を教える中で、がんと向き合いながらも自分らしく生ききった患者の生きざまに触れ、子ども達に生は永遠ではないことを意識させ、周囲への感謝の気持ちや、自分自身のこれからの生き方について考えてもらう授業を行っていることを報告されました。

そして、この「いのちの授業」は、子ども達からもらった感想文に、ひとりひとりの名前を入れて手書きの返事を書き、それが届けられて終了となる、と締めくくられ、とても感動的でした。

がんの子どもに配慮して教育を

第三部では、小学校で食育を実践し、生活習慣を改善するための取組みを行っておられる菖蒲彩氏（武雄市立若木小学校教員）が、文部科学省の委託事業「ICTを活用した食育を通して生活習慣を改善する取組」の成果を報告され、小学生の意識が変わり、食事内容や運動への関心が変わって、児童の肥満度が減少したという実績を示されました。

しかし、そのためには、教育委員会と現場の取組



みが連動することが重要であったことを話されました。また、天野慎介氏（全国がん患者団体連合会/グループ・ネクサス・ジャパン理事長）は、自らのがん経験から、小児がんやAYA世代（若年層）に配慮したがん教育の重要性を力強く主張され、聴衆の共感を呼びました。

教師の出来ない領域での活躍

追加発言は、『未来ある子ども達の為にー「いのちのホームルーム」がん教育プロジェクトー』と題して、宮部治恵氏（NPO法人がんサポーター代表理事）に発表いただきました。28名の仲間と一緒に学校へ訪問し、いのちの大切さや、がんの正しい知識を普及・啓発する活動を行った経験を紹介していただきましたが、教師には出来ない領域に、いわゆる授業ヘルパーとして入り、素晴らしい成果を挙げられていました。

しかし、学校のクラスの授業そのものに入ることは難しく、このバリアは何だろう、との疑問も率直に提示され、まだまだ現場での実践には課題があることを示されました。

垣添忠生先生が特別発言

最後に、特別発言として、垣添忠生氏（公益財団法人日本対がん協会会長）に全体を纏めていただきました。垣添会長の、小学生からがんの予防教育をすることの必要性和小児がんの子どもへ配慮がととても重要であるとの熱いメッセージが、満員の聴衆の心を動かし、感動の中でシンポジウムを終えることができました。

まとめ

今回の公開シンポジウムで示されたことをいくつか纏めてみますと

- 1) すでに小学校からのがん教育はボランティアグループを中心に草の根の形で始まっているが、そ

れには限界があり、やはり、学校や行政がより積極的に取り組む必要があること

- 2) 具体的な取組みは比較的やりやすいが、心の問題に取り組むのは難しく、「いのちの教育」と具体的な活動をどのように結びつけるかが大きな課題であること
- 3) 食育の実践経験から、教育委員会と現場の取組みがうまく連動していることがとても大切であったこと

などが示され、大変意義のある公開シンポジウムでした。

最後になりますが、発表の中で、なるほどと思われた言葉がありました。「中学生や高校生の子どもから、『学校で、タバコはだめだと習ったよ』と言われても、父親にはあまりこたえないが、小学生の子どもから言われると、胸にグサッときて止める気になる。」と。子どもにとっても、親にとっても、教育は小さい時から始めるのが最も効果的であることを示すような、私達の心に残る言葉でした。

（中川原 章 佐賀県医療センター好生館理事長、佐賀国際重粒子線がん治療財団理事長）



報告 Joint Symposium (Korean Cancer Association & UICC - ARO) Cancer and Universal Health Coverage (UHC) in Asia

東京大学情報学環学際情報学府

特任講師 河原ノリエ

6月16日ソウルにおいて、42nd Annual Meeting of The Korean Cancer Association (KCA)での公式プログラムとしてUICC-AROとKCAのJoint Symposium「Cancer and Universal Health Coverage (UHC) in Asia」が開催されました。UICC-AROは、日本癌学会でのUICCシンポジウム



やUICC世界会議、APCCなどの内外の国際会議において議論を重ねて、がん医療における社会経済的課題に取り組んできました。特に昨年9月の国連において「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択され、UICCも推し進めてきたUHCが達成目標となったことを受けて、UICC-AROの活動の中核的課題のひとつとしてこのUHCの推進を位置付けています。

共同座長を務められた赤座英之先生とJae Kyung Roh先生から、これまでの背景を述べられたのち、韓国、日本、インドネシアからの発表が続きました。日本からはWHO神戸センターの野崎慎仁郎先生がWHOのUHCへの取り組みの概要と日本のUHCの状況について発表されました。東京大学副学長の吉見俊哉先生からのご発表は、大学における癌に纏わる学際研究がテーマでした。UHCという新しい概念の社会への実装のためには、医学のみならず社会科学や人文科学の叡知を結集させることが大切であるということは韓国においても共感をもって迎えられました。私、河原は、JICA草の根支援プログラムとして中国ハルビン市郊外の農村で行っているがん医療のUHCを目指す地域活動について発表させていただきました。

来年ソウルで開催されるAPCCに向けての韓国の意気込みが感じられる広報活動でした。

セッション参加者たちは、今後APCC、UICC世界大会などの機会を用い、アジアのがん医療におけるUHC推進のための議論を継続していこうという思いをひとつにしました。



近年ようやく医療保険制度の整備も始まったばかりの国も多いアジアにおいて、がん医療におけるUHCを実現することは、非常に困難なことです。限られた医療資源の中で、がん医療のUHCを目指すことは、よりよい医療とは何かを未来に向けて我々が問われているということだと思います。道のりは厳しいですが、現状の課題をお互いに共有しあう智慧を集めて、UHC達成の足がかりをつくりあげていく場をもつことがUICC-AROのミッションであると感じました。

KCAにおいては 翌日6月17日には、Dong-Young Noh先生と赤座英之先生の共同座長によるシンポジウムOncology Leadership in Asiaも開催され、演者として、岐阜大学吉田和弘先生、熊本大学馬場秀夫先生がご発表されました。

UICC-AROでは、これら二つのセッションでの発表や議論をミーティングレポートとしてまとめて論文化する予定です。

Joint Symposium (Korean Cancer Association & UICC - ARO) Cancer and Universal Health Coverage (UHC) in Asia

Chairs: Hideyuki Akaza (The University of Tokyo, Japan)
Jae Kyung Roh (Yonsei University College of Medicine, Korea)

- 1) **Universal health coverage of cancer in Korea: Prospect and challenge**
Eun-Cheol Park (Yonsei University College of Medicine, Korea)
- 2) **UHC in Japan: Prospect and challenge**
Shinjiro Nozaki (WHO Kobe Center, Japan)
- 3) **Household burden on treating cancer and the Universal Health Coverage in Indonesia**
Hasbullah Thabrany (Universitas Indonesia, Indonesia)
- 4) **What is the Cross-Boundary studies in the future university?: Globalization and the new era of human knowledges**
Shunya Yoshimi (The University of Tokyo, Japan)
- 5) **The road toward UHC: Promoting cancer education in community**
Norie Kawahara (The University of Tokyo, Japan)
- 6) **UHC and equality of cancer statistics in Korea**
Sohee Park (Graduate School of Public Health, Yonsei University, Korea)
- 7) **UHC and Comprehensive plan of cancer control in Korea**
Duk Hyoun Lee (National Cancer Center, Korea)



アジアのがん医療のリーダーシップをいかにして構築していくかについて、各国の参加者からの熱い討論が続きました。

第8回アジア太平洋がん予防学会 (APOCP) 総会の報告

三重大学・病院長顧問、同医学部公衆衛生・産業医学・客員教授

UICC日本委員会 総務幹事 田島 和雄

第8回アジア太平洋がん予防学会総会 (The 8th General Assembly Conference of the Asian Pacific Organization for Cancer Prevention) はオーストラリアのJeff Dunn会長 (クイーンズランド州対がん協会理事長、UICC理事) のもと、2016年4月13～14日 (水～木曜日) にブリスベン国際会議場で開催された。開催地がオーストラリアという地理的条件も関係して太平洋諸国からの出席者が多く35ヶ国から220余名が参加した。日本からは私も含めて7名が参加した。プログラム内容は理事会、総会、懇親会、および招待講演8、口演47、ポスター演題75の合計130課題が報告された。(写真1、2)

第一日目 (4月13日) は午後1時からクイーンズランド州のPaul de Jersey知事による歓迎メッセージから始まり、K-Y Yoo APOCP事務局長 (韓国ソウル大学) の挨拶、続いて私が「APOCPを2000年に発足させた経緯」について報告し、特に、1999年に立ち上げたAPOCP発足委員会 (Malcolm Moore、徳留信寛、福島昭二、津田洋幸ら) では、

- 1) アジア太平洋地域におけるがん予防対策の推進
- 2) 同地域のがん関連情報の収集と相互交換のため

の定期的会議の開催

3) 同地域の若手研究者の育成と雑誌 (APJCP) の発刊などの重要性を検討していたことを紹介した。

基調講演では、シンガポール国立がんセンターのK-C Soo所長が「アジア太平洋地域におけるがん対策の発展」について報告し、UICC本部から出席したCEOのCary Adamsは「過去6年間のUICCの動向」、特にCancer Declarationに掲げた9項目の内容について、概ね国際的な対がん活動は前進していったが、がん検診の普及についてはまだまだ不十分である、と内部評価を含めて報告した。ミャンマーから招待されていた演者が出席できなくなったので代わりにSanchia Aranda (次期UICC理事長) が「オーストラリアのがん対策」、特にがん登録、たばこ対策、緩和ケアなどの発展と今後の展望について報告した。

後半の一般口演はRapid Fire Presentation (発表時間4分半) として40課題が2会場に分かれて2時間以内に報告された。日本から出席した鹿児島大学の嶽崎俊郎教授の日米共同研究による「日本のたばこのニコチン濃度が及ぼす喫煙習慣への影響」について興味深い報告があった。



写真1 学会場遠景 (右は南ブリスベン駅)



写真2 ブリスベン市庁

二日目は、午前中の基調講演として、IARCのCris Wild所長がWilliam Rudder Memorial Lectureとして「世界のがん研究とがん対策の発展」について紹介した。続いて、APOCPのC-H Yip前会長、および韓国の国立がんセンターのJ-S Lee所長は「がん死亡を減らすための二次予防対策の現状と重要性」について報告した。

コーヒープレイク中に理事会を開催、昨年度の活動報告、役員改選、総会、地方会議の開催予定などについて討議した。次期2年間の会長（次期総会会長）として韓国ソウル大学のK-Y Yoo教授（事務局長）、新事務局長は中国がんセンターのY-L Qiao疫学部長、APJCP編集委員長は続いてMalcolm Moore氏、らがそれぞれ選出された。（写真3、4、5）

続いて、Jeff Dunn学会長とY-L Qiao新事務局長（中国、国立がんセンター疫学部長）の司会によりAPOCP総会が開催された。APOCPの主要人事報告として、現事務局長のK-Y Yoo教授が韓国軍中央病院の院長となり10年間の事務局長を退任して国務のために昨日で退席、また、前会長のC-J Chen教授は台湾副総統となり国務のために出席不可となった。

続いて、昨年の学会活動や理事会での審議内容について報告、今後の学会開催予定としては、第9回総会が2018年に韓国のソウルで、第10回総会は2020年に中国の北京で、さらに地方会が2016年にはロシアのサントペテルスベルグと韓国のソウルの二カ所で、2017年には中国の成都で開催されるとの報告があった。

総会終了後、Malcolm Moor（APJCP編集委員長）とDavid Rador（南オーストラリア大学教授）の座長により、13か国（15ヶ国のうち二カ国の代表者は出席不可）の各国代表者らががん対策の現状、特にがん登録の実態について報告した。日本からは東京大学の井上真奈美教授が報告し、「日本では二年前にがん登録が法制化され、今年から全国のがん登録が義務化されたので全国がん登録の精度は著しく改善し、今後のがん対策にも大きく貢献できる」との見通しについて報告した。21世紀になって、日本のみならずアジア各国でNCDとしてのがんが重要な健康問題になっており、その対策が順調に進められている現状が明らかにされた。

昼食を挟んで午後1時半から、一般口演として若手研究者による10課題が2会場に分かれて報告された。



写真3 学会風景



写真4 総会風景



写真5 APOCP理事会

そのうちの6課題はEmerging Research Awardsとして表彰された。私は7課題の座長をD-H Lee (韓国国立がんセンター) と務めたが、「中国のリンシェン地域における27年間の胃がんと食道がんに対する化学予防介入研究により、胃がんの場合は55歳以下で、食道がんは55歳以上で介入した場合に死亡率低減効果があった」との報告は印象的であった。

午後4時から閉会式、Dunn会長が各受賞者を表彰、K-Y Yoo次期会長に代わってD-H Lee事務局長が2018年に計画しているAPOCP総会について案内、さらにY-L Qiao新事務局長がAPOCPの今後の方向性と抱負を述べ、第8回APOCP総会は閉会となった。最後の懇親会はブリスベン川の近くのThe Shore Restaurantで賑やかに行われた。

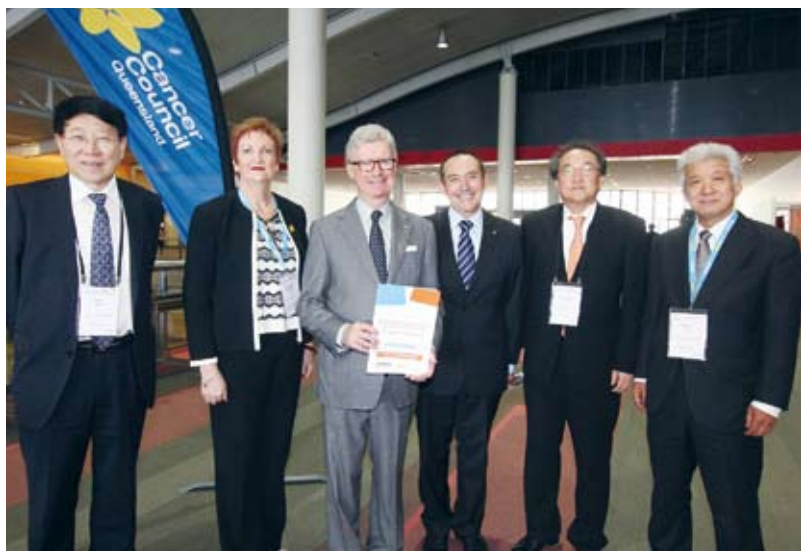


写真7 クイーンズランド州知事のMr. Pau de Jersy (中央)、サンチャ・アラランダ次期UICC理事長 (左から2番目) とAPOCP理事 (学会長のJeff Dunn、新旧事務局長のY-L Qiao、K-Y Yoo、田島和雄



写真6 参加者の集合写真

UICC 日本委員会加盟組織

愛知県がんセンター	(社) アジアがんフォーラム
大阪府立成人病センター	神奈川県立がんセンター
(公財) がん研究会	(公財) がん研究振興財団
(公財) がん集学的治療研究財団	静岡県立静岡がんセンター
国立がん研究センター	埼玉県立がんセンター
佐賀県医療センター好生館	(公財) 佐々木研究所
(公財) 札幌がんセミナー	(公財) 高松宮妃癌研究基金
千葉県がんセンター	東京慈恵会医科大学
がん・感染症センター都立駒込病院	栃木県がんセンター
新潟県立がんセンター	日本癌学会
(社) 日本癌治療学会	(公財) 日本対がん協会
(社) 日本乳癌学会	(特非) 日本肺癌学会
(公財) 日本婦人科腫瘍学会	東札幌病院
(公財) 福岡県すこやか健康事業団	(公財) 北海道対がん協会
三重大学医学部附属病院	宮城県がんセンター

賛助会員 協和発酵キリン株式会社 (山極-吉田国際奨学金)
(公財) 日本放射線腫瘍学会

UICC日本委員会の委員と役割分担

委員長	北川 知行	理 事	
幹 事 総 務	田島 和雄	UICC 本部	野田 哲生
学 術	垣添 忠生	Fellowship 委員	中釜 齊
財 務	門田 守人	TNM 委員	浅村 尚生
監 事	高木 敬三		
	池田 徳彦	アジア・太平洋癌学会 (APFOCC)	赤座 英之
専門委員会			
疫学予防委員会	浜島 信之	アジア・太平洋がん予防機構 (APOCP)	Malcolm A. Moore
喫煙対策委員会	田中 英夫		
教育委員会	望月友美子	UICC-Asia Regional Office (ARO)	赤座 英之
患者支援委員会	吉田 和弘		
TNM 委員会	浅村 尚生		
広報委員会	河原 ノリエ		
小児がん委員会	中川原 章		
対がん協会	坂野 康郎		

2016 年度の UICC 日本委員会総会は
7 月 30 日 (土) 12:00 - 14:30 に
経団連会館で行われます。

UICC ホームページ: www.uicc.org
UICC 日本委員会ホームページ: www.jfcr.or.jp/UICC